

# 視察先別報告 エチオピア

## 【青年海外協力隊】

### 体育隊員活動視察

#### 概要

エチオピアで体育は、保健・体育科目として確立しているものの、設備や道具の不足とともに、身体を動かし実技を指導できる教員が不足しており、理論中心の授業となっている。この課題に取り組むため、青年海外協力隊はオロミア州の公立アワシュ・マルカサ高校で体育の授業を担当し、現地で利用できる材料を利用した教材の製作や、実技授業の工夫について協力している。また、他の体育ボランティアや配属先省庁などと連携し、教員の技能向上を支援することも期待されている。

01

井口 久美子 高校の体育指導で派遣された隊員に案内され、荒れ地のグラウンドを見て回った。隊員が草抜きから始めた運動場は未だスポーツするには不具合で、グラウンドはあってもボールがないサッカー、ボールはあるがネットがないバレーボール、と設備や道具がない。体育は身体を動かすためだけにあるという概念の中で、体操着を忘れずに持ってくるようになったのは情操教育にもつながるようで嬉しいと隊員は言う。保護者、校長は隊員に一定の評価をしている。教員同士の関係も良好とのこと。現地教員の報酬は安価でバブルジョブもあるらしく、今後は教育の質確保のための対策が必要であろう。前任者が校舎壁面に描いた心臓の絵に、そこにある物を使って高度な教育につなげようとする知恵をみた。二期目の今回の派遣で終了するのが残念である。

02

板野 光司 日本の大学を出たばかりの24歳の青年が、現地の言葉もわからない中、2年間エチオピアで体育教師をしていた。グラウンドがなかったため、草抜きから始めてグラウンドを作った。今でもボールがないためにサッカーすらできないと聞いて、苦労していることが伺えた。授業計画を立てても思うようにいくことは少なく、試行錯誤の繰り返しであるとのことだった。そんな中でも、彼はイキイキと活動しており、日々楽しんでいるように感じられた。熱い想いを持った他国の青年と交流しながら、エチオピアの子供たちにも良い影響があればいいと思う。帰国後は教員採用試験を受け、体育教師になりたいという。日本に帰ってから今後の彼や彼が将来教える子供たちに大きな影響があるだろうと思った。

03

今村 健司 社会主義が終わった1991年当時、この国の人口は約5000万人だった。いまは9000万人以上に急増している。貧困に苦しみ知識層は海外へ流出した。現在、学校を増やしつづも、教える教員が足りない。エチオピアの体育科目には日本で見られるような情操教育やチームビルディングといった教育目標が無い。そんな中で北島隊員は、明るく前に進む信念を持っている。彼はここにやって来てから長く放置されていた校庭を草刈し、生徒達が運動できるようにした。授業方針と計画を練るのも同僚教員の中では初めてだ。生徒の親御さんは外国から来た若い体育教師に好意的だという。信念を持って、自ら考えて、行動する、北島隊員の熱心な活動とそのカラッとした明るい性格は、エチオピアの未来を明るくする原動力になっていると感じる。日本に戻ったら教職につきたいと語る彼。日本の子供達にとっても最高の教師になるに違いない。

04

久保 雅義 「世界も、自分も、変えるシゴト。」というポスターをみて、青年海外協力隊への応募を思い立った彼の表情には「信じる者」だけにみられる力強さがあった。若い体育教師である彼には日々の奮闘をそのまま自身の血であり肉とするだけの力があり「今の経験は今後の役に立ちそうかい？」という問いに対して「絶対になると思います」と即答する。しかし彼の現場での活動が国の教育ポリシーに影響を及ぼすには果てしない道のりがあることも事実だ。

彼が日本に戻ったあと「学校の教員になる」ことで彼のすばらしい資質と経験が100%活かされたことになるところだろうか？それを「超えた」より大きな目標をもって突き進んでくれるのではないかとワクワクした気持ちを抑えきれない。

05

進藤 千枝 教育環境が日本とまったく異なり、未整備なままのグラウンドや用具が整わない学校で、生き生きと活動している北島隊員の姿が印象的であった。子供の教育は、国の未来を作る。その一助を担う北島隊員は、活動する喜びにあふれていた。いろいろな苦労があると思うが、何かを作り上げる喜びは、何物にも代えられない。学校の教育課程の未整備などには、多少の疑問を感じた。ただ、“自分たちの生活の向上は、教育にある”と感じている生徒が多いという話には希望を感じた。

7年生から、すべての教育を英語で行うということは、政府が世界に目を向けている証拠であろう。青年海外協力隊員のアグレッシブな姿は、すがすがしいものであった。

Federal Democratic Republic of Ethiopia

06

塚田 好美

体調不良のため参加できなかったが、参加者からのレビューを聞くと、青年海外協力隊員である北島隊員の人柄と熱意に、皆が感動したようだった。体育の授業が理論や目的の伴った実技体育ではなく、単純に身体を動かすだけのものとして考えられているエチオピアで、根本的な考え方から変えることは、人一倍の情熱と根気が必要である。その気持ちが国際協力レポーターにも伝わったものと思う。このように熱心な青年海外協力隊が安心して活動を続けるために、帰国後の就業についても支援が必要だと感じた。青年海外協力隊は、生活するにも神経を使うような異国の地で活動しているのだから、活動中だけではなく、帰国後のサポートも一定程度必要だと思う。JICAと、行政や企業とが連携し、帰国後の就業支援まで行えたなら、青年海外協力隊はより集中し、安心して活動ができるのではないかと考えた。

07

富田 すみれ子

「電車の中吊り広告にあった青年海外協力隊募集の『世界も、自分も、変えるシゴト。』という言葉を見て応募した。」応募した時のきっかけを北島隊員はこの様に語った。北島隊員のその真っすぐな想いと、教師としての仕事に対する真っすぐな姿勢は日本の未来に希望さえ見いだせた程だ。だっ広い草原に突然現れる小さな村での生活は決して便利でも楽でもないはずだ。そんな状況であっても、まるでエチオピアの子ども達の様なキラキラし澄んだ眼差しで、自分が経験した苦悩や挑戦について北島隊員は話してくれた。きっと現地の生徒達は彼から体育だけでなく沢山のものを学び、日本帰国後に北島隊員から体育を学ぶ日本の生徒達もまた多くを学ぶのであろう。

08

中村 明夫

日本の学校をイメージして訪問し、そのギャップの大きさに驚く。職員室とは思えない雑然とした風景や粗末な机や教材類、雑草が生い茂り、でこぼこでヤギの糞が散在するグラウンド。教育環境の厳しさを認識した。生徒たちはセカンダリー（中学校相当）から英語教育が実践され、3割余りしかその上（プレパラトリー）に進学できないという。他国の言語である英語を受け入れざるを得ない状況に開発途上国の現実を見た気がした。他言語を受け入れたら、文化も受け入れることになり、エチオピア人のアイデンティティの喪失を危惧してしまう。現地に派遣された青年海外協力隊員のタフさ、純粋さに感心。授業は1コマ40分で準備を考えると実質25分程度しか指導できない等の困難はあるが、馬飛び等人気種目を通じ日本の体育教育の良さを定着させてほしい。

09

橋本 佳澄

グラウンド整理から始めなければならないことに驚いた。お膳立てされている場所で活動するのではなく、文字通り自分で開拓していかなければならない。信念がなければ務まらないだろう。北島隊員は、生徒はもちろん、同僚の教員やPTAにも好意的に受け入れられているようだ。ひとえにその彼の人柄によるものだろう。エチオピアと日本間のパブリックディプロマシー<sup>2</sup>に大変貢献していると思う。教育も大切だが、一般の人たちに好印象を持ってもらうことが青年海外協力隊のもうひとつの使命なのではないか。

10

三谷 剛

青年海外協力隊の24歳の若者のまっすぐ過ぎる眼が印象的でした。現地語での会話、畑作業が原因で突然不登校になる生徒など想定外の問題を笑顔で説明してくれる様子は、柔軟性の高さや心配りが出来るからこそ首都アジスアベバから車で約4時間離れた田舎町でも生き残っていけるのだらうと感じました。彼の夢は日本で教師になること。彼のような若者が成長して、次の世代の子供を育てることは日本の未来を成長させることに他なりません。体育教育を改善していくという当初の任務でエチオピアへ貢献することはもちろん、それ以上に彼を支援しているODAは日本の若者を成長させる場を提供することで見返りを十二分に得ていると感じました。

11

金子 卓渡

授業の時間が40分、準備を含めると教える時間が少ないという。グラウンドを整備し環境を整え、どうしたら授業に興味を持ってくれるかと北島隊員は試行錯誤されている様子だった。帰国後は教師を目指すという。大学卒業後、今の自分に教えられることがあるのかと悩み、青年海外協力隊の広告を見て応募したという。その瞳はどこまでも真っ直ぐで情熱的だった。当初は日本人が体育を教える必要性に疑問を持っていたが、グローバル教育の意味合いを兼ねていると感じた。私は幼い頃、小学校に外国人教師が来た時のことをよく覚えている。陽気な先生で、行ったことも無いその国が好きになった。情報の少ない田舎では会う人1人でその国の印象が形成されることもあるだろう。北島隊員に教わる子どもたちは日本に親しみをもち、好意的に見てくれているはずだ。

2 「パブリック・ディプロマシー」：伝統的な政府対政府の外交とは異なり、広報や文化交流を通じて、民間とも連携しながら、外国の国民や世論に直接働きかける外交活動のことで、日本語では「対市民外交」や「広報外交」と訳されることが多い言葉です。